

先人に学び 未来をひらく



講演者

アジア土木学会連合協議会(ACECC)会長
金光鑑 氏

1960年ソウル大学工学部土木工学科卒業。1995年4月～1997年4月大韓土木学会副会長、2000年4月～2001年5月大韓土木学会会長、2001年日本大学理工学部交通土木工学科工学博士学位取得、2000年10月～現在日本土木学会フェロー会員、2001年～現在アジア土木学会連合協議会会長、2003年土木学会国際貢献賞受賞、現在社団法人韓日文化協会副会長。

プロフィール

私は1960年にソウル大学土木工学科を卒業し、海軍士官学校特教隊を経て施設将校となり、その後、浦項製鉄株式会社に初代土木課長として勤務し、港湾関係および敷地の造成を中心に製鉄設備の建設を担当してきました。1968年頃、私は日本の製鉄所での研修のために訪日した際、多くの日本の土木技術者の方々と知遇を得るとともに、日本土木学会、土質工学会、港湾協会の3つの学・協会に入会しました。1987年、私が大韓土木学会理事を務めるようになってからは、さらに日韓土木学会を通じた交流も深めてきました。2000年度に大韓土木学会会長、1999年度は韓日文化協会副会長に就任し、韓国国内の土木技術発展のみならず、土木技術を通して新しい韓日関係を構築すべく努力している次第であります。

21世紀は、日本や韓国をはじめアジアで培ってきた土木技術や叡智を結集して、さらなる飛躍・向上を図るべき時代です。このような機運が熟した

21世紀の幕開けとなる2001年4月に、岡田宏・初代アジア土木工学連合協議会(ACECC)会長に続いて第二代目の会長に就任したことは、大きな使命と責任を痛感しているところです。

「土木の絵本」との出会い

1997年11月のソウル市で開催される「韓日運河シンポジウム」に向けて、韓国では当時大韓土木学会副会長を務めていた私が、日本では日本大学理工学部教授三浦裕二先生が中心となって準備を進めていました。開催1年前、私は三浦先生の研究室を訪ねた折り、「土木の絵本」を知りました。その土木絵本シリーズは、財団法人全国建設研修センターが土木の分野で活躍した先人たちの業績をこれからの未来を担う青少年たちに理解し、学んでほしいという意図で作っているものでした。

日本、韓国、あらゆる国を問わず、古来、土木の仕事は私たちの生活を土台から支えてきました。しかし、土木・建設の仕事を一一般の方々から正しく認識されていないことも事実です。その一方で、私たち土木の世界に携わ

る者が土木の仕事の役割や価値をきちんとした方法で、一般市民に伝えなかった面もあるでしょう。土木の役割と魅力を大いにPRすべきです。

現在、アジア全体の建設産業を取りまく環境はますます厳しくなっていますが、こうした今こそ、一般社会の理解を深め、明日をになう青少年に対する土木教育は最も重要で不可欠であると思います。その先駆的事例として、この土木の絵本シリーズは、アジアの土木界が一丸となって取り組む方向性をも示唆していると確信します。

「先人に学び、未来をひらく」ことこそ、歴史の大ききな転換期に必要な視点だと思えます。

先人に学び、未来をひらく

日本の歴史を紐解くと、土木技術分野が優れていただけでなく、土木技術者としての倫理観を兼ね備えた先人が多く見受けられます。土木の絵本シリーズ・全5巻の5冊目「海をわたり夢をかなえた土木技術者たち」で取りあげられた3人の土木技術者、青山士・八田與一・久保田豊という先人たちがそうです。



青山士・八田與一・久保田豊という技術者たちには、共通した一人の師がいました。日本の土木を近代化に導いたパイオニア・広井勇博士です。

広井勇は札幌農学校教授、小樽築港事務所初代所長、東京帝国大学工科大学教授などをつとめた港湾・橋梁の世界的な権威です。広井勇が考案したコンクリート・ピースによる百年試験が現在も使われていることは驚嘆に値します。その広井勇から多くの教え子たちは、土木工学について次のように教えられたそうです。

「もし工学がただ人生を忙しいものにするのなら何の意味もない。仕事が数日かかるところを工学によって数時間に縮めて一日の仕事を短くし、人が静かに人生を思う余裕を与えるものでなければならない」と。

土木の仕事とは、人々の生活を豊かにすることである。3人の教え子、青山士・八田與一・久保田豊は、この広井勇の教えを深く心に刻み込んだに違いありません。

人類のため国のため 青山士

「技術は人なり」、これは青山士の言

葉です。講演会で出会ったキリスト教信者・内村鑑三の言葉が青山の人生を大きく変えました。その言葉とは、「我々が死ぬときには、生まれたときより世の中を少なくとも善くしていこうではな

いか」というものでした。これはまさに福祉そのものといえます。世の中を自分が生まれたときよりも善くして後世に残す仕事こそ、土木の仕事です。まさしく広井勇の教えと同じでした。

パナマ運河工事で土木技術者としての勇気と能力を発揮した青山士は、その後、荒川放水路工事や信濃川補修工事で大きな業績を残しました。

新潟県信濃川の大河津分水路補修工事は、水害と貧困に苦しんでいた越後平野の農民たちにとって長年の悲願でした。青山士はキリスト教信者の立場からも、土木工事を通じて何とか農民たちを助けたいと願っていたのでしょう。同じキリスト教信者の立場から社会運動家の賀川豊彦らも集まってきました。賀川豊彦は「一人が万人のため、万人が一人のため」と言い続け、後にノーベル平和賞の候補にもなった人です。

大河津分水路を完成させた青山士は、その竣工記念碑に日本語とエスペラント語で、次のような文を刻みました。萬象二天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ(碑の表) 人類ノ為メ國ノ為メ(碑の裏)

ここには、クリスチャンとして土木

工事に打ち込んだ青山の人生観が刻まれているような気がします。

昭和9年に内務省第5代内務技監、その翌年、土木学会第23代会長になった青山士は、その会長講演でCivil Engineeringを「文化技術」と定義しました。「社会の進歩発展と文化技術」と題した講演で、文化技術が社会の発展と社会の平和のためにいかに重要であるかを力説されたと聞き、まさに「技術は人なり」と感じ入った次第です。

また、1937年、日本土木学会を辞した青山士は、「土木技術者の信条」の中で次のようにまとめておられます。

「土木技術者は国運の進展ならびに人類の福祉増進に貢献しなければならない」

大地に水を引く 八田與一

広井勇の薫陶を受けて海をわたり、台湾の大地に水を引いた土木技術者が八田與一です。

毎年八田與一技師の命日である5月8日には八田與一技師を偲ぶ墓前祭が、八田與一が嘉南につくった烏山頭ダムほりので行われます。不毛の地と呼ばれた嘉南平野を台湾最大の穀倉地帯に変えて、自分たちの生活を助けてくれた日本の土木技術者のことを子孫代々語り継いでいるのです。

現在、八田與一という土木技術者のことを、どれだけの日本人が知っているでしょうか。海の向こう側で一人の日本人技術者のことを子孫代々供養してくれている人たちがいることをどれだけの人が知っているのでしょうか。昨年、来日を予定しながら実現できなかった李登輝・台湾前総統は、その講

the Content of a Lecture

演会で八田與一技師のことを話すはずだったと聞きました。あんなに素晴らしい世界的な土木エンジニアがいたことに日本人は誇りをもってほしいというメッセージが込められていたのだと思います。

地域づくり、ダム建設 久保田豊

日本工営をつくった久保田豊さんは朝鮮と満州の国境を流れる国際河川・鴨緑江に、当時世界最大級規模の水豊ダムをつくりました。このダムは着想、スケール、技術、建設機械などすべての点で全く斬新なものでした。彼は、赴戦江ダムプロジェクトでは川の流れを堰き止め、トンネルを掘り、高低差が大きい東の東海(日本海)へ流れを変えろという画期的な発電計画を考えました。

1962年頃から、久保田豊は韓国発電の技術協力も行っています。春川および蟾津江発電所です。蟾津江ダム計画は朝鮮電業によって建設が進められ、中途まで出来ていた未完成のダムを完成させ、水路も掘り直しして3万kWの発電所を建設するというプロジェクトでした。一方、北漢江の上流の春川開発計画は5万7,600kWの出力をもつ発電所の建設であり、韓国電力が調査・設計したものを久保田さんの会社が工事の技術顧問となって完成させました。さらに、韓国政府は昭陽江という多目的ダムの計画と設計を日本工営に委託しました。これは当時、また現在でも韓国最大のダム建設で、工事中に大洪水に見舞われたりと、水との闘いに終始した大変なプロジェクトでした。その功績を偲び韓国政府は、産業界の最高勲章に当たる金塔産業勲

章を授与しました。

八田與一と久保田豊が海外で設計や工事を行う上での共通点は、相手の国の歴史や風土、文化、生活習慣をよく調べ、そこに住む人たちの立場に立って設計し、工事を推し進めたということです。そして、その地域の人たちと協力しながら仕事を行うことによって、地元住民の理解と信頼を得ていったということです。

その他の先生

高橋裕先生は河川工学の第一人者で、河川・水資源に関するさまざまな功績をあげられています。1994年明治村賞、2000年には国際水資源学会よりアジア人初めてクリスタルドロップ賞を受賞されています。

1953年の筑後川水害調査等から、1960年代より既に現在の河川行政の方向性を示す流域治水、河川事業と環境との調和といった哲学を示されておりました。

韓国との関わりも深く、1977年韓国経団連の招待での講演では、「都市化が新型水害を発生する」と警告され、また、1987年の東大退官記念のシンポジウムでは韓国、北朝鮮、中国、香港、台湾の代表をお招きいただき、東アジアの水文学・水資源の行政と学者の協力が不可欠であると示唆していただきました。2001年には大韓土木学会の総会において「地球の水危機と土木技術者」について講演をしていただきました。この3月の世界水フォーラムではパネラーの一人として高橋先生からお招きいただき、先生からさ

まざまなことをご教授いただきまして、改めて学ぶべきことが多いことを知りました。

三浦裕二先生は道路工学がご専門で、長年、道路舗装の研究・技術開発に従事され、その間、幾多の若き道路技術者を日本大学で育成・輩出されました。また、透水性舗装の生みの親でもあります。この透水性舗装の開発と普及が認められ、日本土木学会の環境賞を受賞されております。

先生は道路の延長線上にある、水問題にも深く関わってこられて、地元千葉県の水環境の改善と夢を語っている「房総水の回廊構想」の提唱者でもあります。この3月の世界水フォーラムでは「水と交通」セッションの国内実行委員長という重責の中、「水と交通」からの提言をとりまとめられました。

お二人以外にも河川行政の立場から韓国の発展にご協力を頂いた元国土技術研究センター理事長の小坂忠先生、港湾整備にご尽力頂いた鶴田千里先生、合田良美先生等多くの方々にご協力をお願いいたします。

漢字を伝えた 王仁博士のこと

3世紀末、倭国(日本)と百済は友好関係にあって、多くの百済人が倭国を訪れました。その中でも王仁博士は有名です。

大阪の枚方市に王仁博士の墓と伝えられる王仁塚があります。その近くに菅原東小学の校歌の冒頭に王仁の名前が出てきます。古今和歌集にも王仁博

士が大阪の難波をたたえて詠んだ歌があります。また、東京の上野公園にも王仁博士のモニュメントが2つあります。1940年に、234名の方が費用を出しあってつくったものです。

王仁博士については実在した人物かどうかを疑問視する人もいますが、重要なのは、かつて日本と最も友好関係にあった百済から、東アジア文化の基盤となる儒教と漢字が伝えられたこと、そして、そのことに恩を感じた人たちが今でもたくさんの文化を伝えてくれた王仁博士を大切に思っているということです。

この話は何かに似ていると思いませんか？ そうです。私が先ほどお話しさせていただいた八田與一技師のことです。ある日、はるばる海を越えてやってきた一人の日本人が、異国の大地に水を引いて、今でも台湾の人々に感謝されているという事実と似ています。友好と交流はこうしたことを検証することから始まるのではないのでしょうか。

アジアの発展と交流

今、私たちの住むアジアを取りまく環境は大変厳しいものがあります。しかし、こういう時期だからこそ、私たちは先人たちの友好的な交流を想起し、未来に生かさなくてはなりません。特に、世界の人口の6割をしめるアジア全体の平和と発展を考えても、私たち土木技術者の国境を超えてはたすべき役割は多いと痛感します。

これは何も土木技術を通じた交流だけではありません。文化における草の

根の交流も大事です。私は現在、韓国の社団法人韓日文化協会の副会長も務めていて、文化や人的交流を通じて相互理解と協力を図るため、日本人留学生の交換支援を行っています。この活動は元をたどりますと1957年の日本における日韓文化協会の設立までさかのぼります。この協会は戦前日本で活躍していた朴春琴という朝鮮出身の実業家の遺産を基金としてできた財団で、以来、韓国人留学生に奨学金を支給するという仕事を続けております。

私が私なりの考えで、韓日交流をより一層促進するために必要と考えている書籍には次のようなものがあります。

土木の歴史を理解するために、高橋裕先生がお書きになった『現代日本土木史』

先人を学ぶ書籍として、青山士を描いた写真集『後世への遺産』

韓国と日本、交流促進のための参考

として『浦項製鉄の建設回顧録』、

『博士王仁 - 日本に植えた韓国』、

『日本書記古代語は韓国語』、『日韓

共鳴 二千年史』

おわりに

最後に、縁の下で汗水流してとても忙しい、転勤も多い土木エンジニアだからこそ、奥様や家族を大切にしてほしいというお話しをして締めくくりたいと思います。

孫戸妍(ソン・ホヨン)という歌人は、韓国でただ一人日本の和歌を詠む歌人として新年の宮中歌会始にも招待された女性です。そのソン・ホヨンさんが、愛するご主人をなくしたときの歌を残しています。

「君よ わが愛の深さを ためさむと
かりそめに 目を閉じたまひしや」

土木エンジニアたちが素晴らしい仕事を成し遂げた後、息を引き取っても、後から奥様や家族からこんな素晴らしい思いを寄せられるように、どうぞ今からでも奥様をお大事にしてください。

(財)国土技術研究センター創立30周年記念講演会で行われた講演を要約したものです。

